

湊神社の神主河田秀憲はその圖を描いた屏風にそへて信田屏風記を書いて居り、龜尾記には、宮腰街道より冬瓜町に至る道に信田小太郎塚があるとし、三州名跡誌には宮腰領の内信田田があることを載せて居る。又雜能登路記には、輪島の沖崎といふ所の後庭に、信田小太郎の腰懸石があるとしてある。小太郎は相馬の將門の孫で、人商人に勾引され、敦賀から宮腰に來り、所々を彷徨したことが幸若の信田物語にあるから、それより起つた偽蹟である。

シノダサダスケ 篠田貞亮 通稱余太夫。父判太夫は三十人頭であつた。文化中家督百石を襲いで組外に列し、文政五年定番御馬廻に移り、同年閉門、七年御免の上俸十石を減ぜられ、十二年三月揚屋に入り、天保元年六月十四日越中五ヶ山に流された。

シノダスケザエモン 篠田助左衛門 祿四百石。大坂再役に討死した。その子助左衛門は八百石に至り、御先手物頭を勤め、寛永十六年前田利常に從うて小松に移り、萬治元年侯の薨後綱紀の御用人となつたが、寛文三年五月嶺孫左衛門の子覺之丞と喧嘩して死し、家斷絶した。

シノヅカテキホ 篠塚萩浦 珠洲郡小木眞宗東派法融寺の僧。京都に出で、摩島松南に學び、江戸に往いて安積良齋、野田笛浦に詩文を習うた。萩浦慷慨、志士と往來して大義名分を唱へたが、その父之を以て釋門の行爲にあらずとし、歸郷寺務に就かした。安政二年十月歿、享年四十一。萩浦遺稿がある。
シノヅカフチャク 篠塚不着 珠洲郡小木村眞宗東派法融寺の僧。天保十四年を以て生

まれた。好みて宗乘典籍を讀み、小樹又は萬庵と號して、詩書と南宗の書を能くし、又東北に巡教して大に功があり、明治八年本願寺上局議員を命ぜられ、三十七年大僧都に進んだ。同年十月寂、年六十二。

シノノキウタノスケ 篠井雅樂助 本多政重の家老で、祿千石を受け、廿五歳の時、大坂陣に出軍して武功を立てた。正保二年政重の子政長の家督を相続した時、尙幼年なるを以て、雅樂助はその後見となり、次いで興力を命ぜられ、寛文四年歿、享年八十九。

シノハラ 篠原 江沼郡北濱に屬する部落。今笹原に作る。壽永二年源平の戦があつたのもこの地であるが、現に實盛塚、手塚山、鬚洗池等のあるのは舊跡として信じ難い。八雲御抄には『しの原、加賀』として、歌枕とせられる。

シノハライケ 篠原池 江沼郡に屬する。名所方角抄に、橘の宿より二里許り東であるとしてゐる。加賀志微に、篠原池・成合池・潮津潟共に同一で、今の柴山潟のことであると斷じて居る。

シノハライハマツ 篠原岩松 出羽一孝の孫。父は出羽某で一萬千二百五十石を受け、元和七年歿した。岩松幼にして祿三千石を食んだが、早世して家斷絶した。

シノハラカツアキ 篠原一精 通稱松次郎。監物。號を敬齋といふた。文化十二年父頼母一進の遺知三千石を領し、文政二年定火消、十一年奏者番、天保元年寺社奉行、五年御算用場奉行、次いで公事場奉行・魚津在任・寺社奉行等に歴任したが、爾後の經歷を詳かにせぬ。藩政に關しては寺島兢と意見を同じくし

た。

シノハラカツタカ 篠原一孝 尾張の人。幼名虎、後勳六。篠原彌助長重の養嗣子である。歳十六、越前府中で前田利家の近侍となり、祿百三十石を賜はり、次いで柳瀬及び末森の役に功があつた。天正十八年豊臣秀吉東征の際、また利家に從うて出陣創を蒙り、十九年六月從五位下肥前守に叙任、後利長の肥前守を稱するに及び出羽守と改めた。文祿四年一萬七千石を受け、七年千三百石を加へ、大坂兩陣の後一萬五千六百五十石に上り、人持組頭に任じ、元和二年七月廿二日歿。享年五十六。舊記には多く篠原を笹原に作る。

シノハラシゲタカ 篠原重孝 通稱監物。出羽一孝の三子。配分知千石を受け、後二千石を加へ、寛永十三年歿した。この系統は世藩に仕へる。

シノハラジユク 篠原宿 江沼郡に在つた。源平盛衰記平軍加賀に進入の條に『權亮三位中將維盛已下宗徒の人々一萬餘騎篠原の宿に控へたり。』と見え、義經記には『判官その後しの原にとまり給ひけり。』とある。加賀志微の説に、兵部省式では、この隣邑潮津を驛家とするから、壽永の頃には篠原を宿驛としたか、または此の地までも潮津の領で、篠原即ち潮津の古驛であるかであらうとしてゐる。

シノハラジヨウ 篠原城 江沼郡に屬する。源平盛衰記壽永二年五月二日の條に、『平家は越前國を打隨へ、長畝城を立、齋明を先として加賀國へ亂入。源氏は篠原に城郭を構へて有けれども云々』と見えるが、越登賀三州志に、今篠原に城跡がないとし、江沼志稿にも城跡は詳かでないとしてゐる。蓋し一時の陣

營をさしてかくいうたのであらう。

シノハラシン 篠原新 江沼郡北濱に屬する部落。藩政時代には篠原の枝村とし、獨立の村として數へなかつた。今笹原新に作る。

シノハラジンジャ 篠原神社 江沼郡篠原に鎮座する。式内等舊社記に、『篠原神社。式内一座。篠原村鎮座。今稱塩釜明神。或云祭神天兒屋根命。今爲白山比咩社。』と見える。又羨紀聞には、『この社をやしはの宮といひ、社前の碑にも八白和祠とあると記し、加賀志微には、やしははやしはの謬で、潮津を八塩湊と呼んだことから起つたのなるべく、その潮津と篠原とは稍隔離してゐるが、潮津潟が外海へ切れて、篠原附近を舟が通うたといふから、しか呼んだのであらうとしてゐる。しかし加賀志微の説は確證がない。

シノハラナガシゲ 篠原長重 通稱彌助。前田利家の夫人芳春院の從弟。利家に仕へて七百石を領し、末森戦役の時には魚住準人と共に金澤城に留守した。出羽守一孝の養父である。

シノハラナガツグ 篠原長次 幼名彦四郎、後織部。彌助長重の第二の養子で、出羽守一孝の義弟であつた。九歳の時前田利家に仕へて百石を受け、利長襲封の初五百石を加増せられ、大坂兩役に從ひ、その後役に岡山口で槍功があり、兄一孝の卒後祿二千四百石を加賜せられた。後寛永中利家三十三回忌の法事奉行となつた際、石野讃岐と争うて河北郡田島に配せられたが、居ること三月の後許され、次いで八年十一月三千石を増し、併せて六千石を受け、慶安二年歿。長子織部長經五千石、二子六郎左衛門千石を襲いだ。